

27) 古典にみる砭鍼の臨床的意義について

ON THE CLINICAL MEANING OF  
“HEN SHIN” APPEARING IN CHINESE CLASSICS

関西鍼灸短期大学 坂本 秀治  
南小岩接骨院 ○市川 太郎

Hideharu Sakamoto & Taro Ichikawa

石ばりの最初の記述は、紀元前11世紀から12世紀頃の資料を集めると言う「山海経」とされる。中国医学における5つの治療法の起源を5つの方角に配置している「素問」異法方宜論篇において「砭石は東方より来る。従って東方に配置される」と説述している。また「血氣形志篇」王氷注によれば「石は石鍼を謂う。即ち砭石なり」としている。

一方ニーダムは砭の用語について、その著「中国のランセット」の中で「辞書編纂者により“いしばり”と言う奇妙な語が与えられることが多かった」と言っている。

有名な神医「扁鵲」は砭石に通じ、扁鵲とはまた「石鍼」をさすこと、ないしは「石鍼の神の名」であるかもしれぬ公算が大きいとする森田氏の説にもあように、名称は知られていても実体は全く知られていないようである。

「本草綱目」にも「砭石別名鍼石」とあり、砭石に関して、「知る者」無しと述べるに留まる。この見解は以後「和漢三才図会」にも引き継がれている。

以上に見られるように、古典でも名称に知られるのみで実体の判らない「砭石」とはどのような石かにつき、東洋的立場に立って文献的考察を加えてみた。

古代中国で、針にいかなる種類の「石」が利用出来たかにつき、ニーダムは想像してフリント、マイカ（雲母）、石綿、及び玉等を挙げている。また「和漢三才図会」では青石「砭」（といし）の記載が見られ、これはその条によれば蒼色で「青砥」と言い、山城の産で上品である。丹波及び防

州岩国産がこれに次ぐとしている。

その他、貴金属や金、銀を細かく打ち延ばしたであろうことも考えられる殷代の民族はまた竹ヒゴを作ったり、骨や角で尖った楊子を針治療に用いたりしたことが想像できる。

一般には砭石と称されるものは、矢じりからとったものと言われている（鍼灸重宝記）。

弥生時代の石鍼には打製と、磨いて作る磨製がある。この頃の石器で稲を摘むための穂摘み用石器（石包丁）、旧石器時代のナイフ型石器、尖頭器などや石鍼が吉野ヶ里遺跡から発見されている。そして恐らくはサヌカイト原石から簡単に作られたと想像される。石ばりを砥石で磨くことも或は砥石そのものであることも考えられる。

古典の中にも例えば扁鵲の医話（戦国策）に「属鍼砥石、以取外三陽五会」とか、また「素問」宝名金形論の「砥礪鋒利して以て其の小大の形を制して病と相当つ」、「塩鉄論」五十六申韓にみる「鍼石」と、「礼記」卷11の「砥礪廉隅」等々このことを裏付ける要素は多い。

伝説、神話を多く含んだ中国古代の地理書「山海経」は奇想天外な古めかしさを感じさせるが、この「山海経」にも陰陽面から見るととき一定の原則（規律）が見出されると言う。この経の原則に従えば砭石は陰陽両面を代表するに対し、箴石に関しては「高氏の山」、「鳧麗の山」に表されるように陰面を代表する。

箴石同様陰面に表す顕著なものとして「鉄」が挙げられる。これに対して、砭石は時に陰面を代表するとは言え略陽面を代表するとされる。